

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24402
 研究種目：基盤研究B
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21330119
 研究課題名（和文）在日コリアンの労働世界に関する実証的研究－「国境をまたぐ生活圏」の形成と変容
 研究課題名（英文）An Empirical Study about the labor world of Koreans in Japan-the creation and modification of "Life space across the borderline"
 研究代表者
 伊地知 紀子（IJICHI NORIKO）
 大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：40332829

研究成果の概要（和文）：本研究は、「国境をまたぐ生活圏」の形成と変容という視点から、朝鮮半島および済州島から日本への人びとの移動を分析することによって、就業ネットワークそのものが解放前後を通して家族親戚・友人・同郷者ネットワークをベースに現在まで再編成されてきていることを検証した。これにより、在日コリアン研究においてその蓄積が皆無に等しかった密航形態の渡日研究についても今後の課題と展望を見いだすことができた。

研究成果の概要（英文）：This study verified that the network to get the work in Japan which was based on the family, the relatives and the relationship of friend and the same province has been reconstructed by analyzing the people's movements from a Korean peninsula and the Jeju island to Japan from the aspect of "Life space across the borderline". As a result, we found the tasks and the view for the next project about the moving to Japan by stowing away from Korea, about which the Korean studies in Japan have had little research result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
年度			
総計	9,800,000	2,940,000	12,740,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：済州島、在日、生活圏、労働、生活史、4・3事件、国境、移動

1. 研究開始当初の背景

（1）従来の在日コリアンに関する研究においては、労働世界に視点を置いて日韓双方を視野にいれ、しかも解放以後まで含めたものは管見ではない。韓国においては、在日コリアンに関する研究そのものが日本で刊行された研究書の翻訳が主であり、網羅的また全体史的なものとして時代ごとの就業実態が断片的に紹介されるのみである。日本

において在日コリアンの労働世界を取り上げている文献は、韓国併合前について山脇啓造『近代日本と外国人労働者』（1994）、戦前期の下層労働者の就業構造について分析した玉井金五・杉原薫編『大阪／大正／スラム—もうひとつの日本近代史』（1986）や杉原達『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』（1998）などがあり、解放後については河明生『韓人日本移民社会経済史』（1997）があ

げられるものの数字で検証する傾向にあり、本研究が実施する生活史調査によって人びとの生活実態を内部から調査研究するものは皆無といえる。

(2) 本研究が扱うなかで、特に解放後から1988年までの密航による渡日者への調査は、その背景に済州島4・3事件や朝鮮戦争があり、朝鮮半島情勢に関わることからこれまで困難であった。しかし、近年この時期の渡日者について、本研究のベースとなった基盤研究C(課題番号18530386)においても実績が積み重ねられてきたように次第にミクロレベルでの調査が可能となってきた。そのため本研究のように、日韓双方の社会変化を視野に入れた労働世界、しかもオールド・カマーとニュー・カマーの連続性と非連続性についての研究はこれまで皆無であったことから、今後の研究成果が待たれる領域なのである。

(3) 伊地知(代表者)は個人研究として、「日韓の民衆生活交流史-済州島を事例として-」というテーマのもと、近現代史において日本の植民地支配を経験した済州島に住む人びとや国境を越えて在日する人びとの生活実践を社会変動との関連とともに分析し、構造化というマクロな社会変化に対する個人の主体的対応の可能性を考察してきた。その後、解放直後の在日済州島出身者の生活史についての研究が希少であることから、基盤研究Cを受け、本研究の分担者でもある藤永、高村、鄭雅英、高正子各氏と調査を開始。そのなかで、解放直後の済州島出身者の移動については、済州島4・3事件による影響が大きいことが明らかになった。さらに解放前に形成された「国境をまたぐ生活圏」を維持・再編してきた要因の一つに、解放前に従事していた仕事との関係が見出された。特に済州島出身者の場合は「職工」が多く、技術を取得した人びとが在日に至り独立経営していったケースが見られる。そこから、4・3、朝鮮戦争などから避難し密航してきた人びとが生活する手段を得られた。本研究では、こうした済州島出身者の就労プロセスを見ていくことによって、他の朝鮮半島地域出身者についても明らかにしていく。さらに、解放直後の都市と地方の在日コリアンの生活圏形成と変容についてみていくことによって、在日コリアンの労働世界が日本社会の経済構造をどのように支えてきたのかを、文献資料とともに生活史調査を実施しながら、本国との関係性のなかで考察する研究を開始するに至った。

2. 研究の目的

(1) 朝鮮の解放後、在日する人々の歴史・法的地位・差別・アイデンティティなどについて数々の研究が蓄積されてきた。当初は歴

史や法的地位といった側面に重心が置かれていたが、次第に差別、そして文化・アイデンティティと関心の幅が広がっていった。在日コリアンについての研究テーマが細分化されていく一方で、ニュー・カマーについての研究も増加している。しかし、こと在日コリアンの生活世界から見た場合、オールド・カマーとニュー・カマーを全く異なる存在として扱うことが困難なケースが少なくない。1988年以降の渡日者をニュー・カマーと位置づける傾向にあるが、解放後から1988年以前も多くの人びとから密航という形態をとり、解放前あるいは解放直後に渡日した家族親戚・友人・同郷者を頼って日本にきているからである。実は、こうした時期の朝鮮半島および済州島からの人びとの移動については、在日コリアン研究においても皆無に近いといえる。

(2) 本研究は、こうした在日コリアン研究の空白部分を埋めるものであり、なかでも視点を労働世界に置くものである。なぜなら、解放前も後も、渡日して来た人びとの生活を維持する手段は就業であり、就業ネットワークそのものが実は解放前後を通して現在まで再編成されてきているからである。こうしたオールド・カマーとニュー・カマーの関連性を含めた在日コリアンの労働世界を解明するには、「国境をまたぐ生活圏」(梶村秀樹、1985「定住外国人としての在日朝鮮人」『思想』No.734、pp.23-37)という視点を改めて導入する必要がある。

こうした視点にたつて日本と朝鮮半島の歴史を再考する研究としては、高鮮徹『20世紀の滞日済州島人-その生活過程と意識』(1998)、杉原達『越境する民-近代大阪の朝鮮人史研究』(1998)、および文京洙『済州島現代史-公共圏の死滅と再生』(2005)のみである。しかし、解放直後の生活史や密航による渡日者の生活史については分析が薄い。韓国済州島で起きた4・3事件や朝鮮戦争に関わる渡日について語ることが困難であったことにも拠るが、この点については近年ようやく研究が始まったばかりであり、人びとが解放後在日するに至った経緯や本国との繋がりとといった部分は今後の課題となっている。

(3) 本研究は、在日コリアンの労働世界を解放前後の連続性・非連続性に焦点を当て、研究蓄積が比較的多い済州島出身者を調査研究の軸にすえ、朝鮮半島出身者の動向とも比較しながら、在日コリアンの労働世界そのものの変容と日韓社会の変動との関連性を検討することによって、「国境をまたぐ生活圏」形成のネットワークや就業システム、人びとのアイデンティティや空間感覚・生活意識といった複眼的視野を含んだ研究へと発展するものである。

3. 研究の方法

(1) 学際的研究方法の検討

本研究は社会学、歴史学、文化人類学、経済学、国際政治学の研究者による共同研究であるため、対象を同じくしてもその分析方法や視点などについては相違がある。本研究代表者および研究分担者ならびに連携研究者は、専門分野は異なりながらも同じく日本と朝鮮半島に関連するテーマで研究を蓄積してきた。そこで本研究において、改めて個人研究の知見を持ちより、他の研究者・院生を加えて勉強会を開きつつ、学際研究としての本研究の意義を深める。

日本国内の研究者のみならず、韓国の研究者との意見交換を行う。韓国では、在日コリアンについて従来の網羅的な研究をさらに深める必要性が問われている。なかでも、19世紀以降の在日コリアンの歴史については、済州島での研究が先行しており、2010年度国立済州大学校に在日済州人センターが完成予定である。現在、済州大学校の研究者が日本でも資料収集を行っている。今後は本研究成果が日韓双方での研究へ寄与する可能性が十分認められることから、本研究も、こうした国際研究の一環として位置づけられる。そこで、調査対象地は日本国内のみならず、韓国においても実施し、その成果を韓国においても発表する。

(2) 個別領域における研究の発展

代表者と分担者および連携研究者は、それぞれ日本の植民地支配と在日コリアンの経験を民衆の視点から捉え直すことを試みてきた。本研究を通して、それぞれの個別テーマの発展に反映するべく文献研究と実証研究の総合を目指す。

(3) 文献研究およびインタビュー調査

代表者と分担者および連携研究者は、それぞれの専門が異なるため、本研究テーマに沿った文献資料と合わせてこれまでの成果を各自で検討し、インタビュー調査の予備知識を共有するための準備をする。文献だけではなく、本研究に関連する情報を有する在日コリアンの研究者から直接情報の提供を依頼する。インタビュー調査については、代表者と分担者および連携研究者がすでに有している人的ネットワークをベースにしなが、調査対象地の在日民族団体・民族学校・商工会などへも協力を依頼する。

調査対象者が確保され次第、順次インタビューを行う。ICレコーダーを用い、本研究に関心のある大学院生や研究者に依頼してインタビュー内容の起こしを行う。依頼した人びとへは謝金を支払う。

インタビュー内容を起こしたものは、代表者と分担者が中心となり連携研究者および研究協力者とも打ち合わせをしたうえで編集し、

調査対象者に確認していただき、公刊の是非を伺ったのち、許可が出た場合公刊する。研究成果は、代表者と分担者がそれぞれ所属する研究会や学会にて公表する。

4. 研究成果

(1) 日本では渡日時期が異なる 17 名の方に生活史調査を実施した。対象地域は、大阪・東京・秋田・岩手・滋賀である。本研究は、社会学（伊地知）・歴史学（藤永）・文化人類学（高村・高）・経済学（鄭）・政治学（文）による学際的共同研究であるため、各分野の知見を突き合わせながら調査研究を実施した。

(2) これまでの研究成果のなかから 5 本の生活史記録を韓国語に翻訳し、図書として韓国にて公刊した。本研究期間に調査したインタビュー内容については、調査対象者の了承を得たうえで編集を終了したものから順次『大阪産業大学論集人文・社会科学編』へ掲載した。インタビュー内容の起こしは、本研究に関心を持つ大学院生・研究者に協力を依頼した。本研究は、プライバシーの問題に関わるものであるため、必ず調査対象者に調査後の内容を確認し、公表についての許可を得たのち公表・公刊している。学会発表については、韓国での国際シンポジウムと学術大会にて研究代表者および研究分担者が報告し、日本においても国際シンポジウムおよび研究大会にて研究代表者および研究分担者が報告した。特に、韓国での 4・3 研究所主催の国際シンポジウムは本研究のテーマをシンポジウムの主テーマとしたものであり、また朝鮮史研究会第 48 回大会では本研究についての分科会が設定されたことから、本研究が国内・海外において一定の評価を得ているといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①伊地知紀子「泉靖一『済州島』が示す済州島研究の意義と課題」『耽羅文化』38, pp. 37-56, 2011 年, 査読有。

②文京洙「100 年の葛藤を超えて一戦後日韓関係の歩みと相互認識」『アジアアフリカ研究』399, pp. 10-26, 2011 年, 査読無。

③伊地知紀子, 藤永壮, 高正子, 鄭雅英, 高村童平, 福本拓, 村上尚子, 皇甫佳英, 高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（8・下）-金春海さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文・社会科学編』Vol. 9, pp. 143-158, 6 月, 2010 年, 査読無。

④伊地知紀子, 藤永壯, 高正子, 鄭雅英, 高村童平, 福本拓, 村上尚子, 皇甫佳英, 高誠晩「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(8・上) - 金春海さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文・社会科学編』Vol. 8, pp. 69-88, 2月, 2010年, 査読無。

⑤文京洙 ‘Origins of Current Problems of Korean Residents in Japan’, *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, vol. 3, pp192 - 207, 2009, 査読無。

〔学会発表〕(計13件)

①伊地知紀子「「国境をまたぐ生活圏」の形成 - 在日済州島出身者の生活史から -」『釜山大学校韓国民族文化研究所・大阪市立大学都市文化研究センター共催第二回共同学術会議』(於:釜山大学校・韓国), 2月9日, 2012年。

②伊地知紀子「帝国日本と済州島チャムスの出稼ぎ」『第45回 国際学術シンポジウム』(招請講演)(於:東国大学校文化學院日本學研究所・韓国), 12月17日, 2011年。

③伊地知紀子「在日済州島出身者の生活史調査に学ぶ」『現代韓国朝鮮学会第12回大会』(招請講演)(於:神戸大学), 11月19日, 2011年。

④高村童平「在日済州島出身者の口述史と四・三事件」『朝鮮史研究会第48回大会』(於:立命館大学衣笠キャンパス), 10月23日, 2011年。

⑤伊地知紀子「生活史から見る在日済州島出身者の移動経路」『朝鮮史研究会第48回大会』(於:立命館大学衣笠キャンパス), 10月23日, 2011年。

⑥伊地知紀子「日本帝国圏内の済州島出稼ぎ海女」(韓国語), The 10th ISKS International Conference of Korean Studies (於:プリティッシュ・コロンビア大学、バンクーバー、カナダ), 8月25日, 2011年。

⑦伊地知紀子「在日済州島人の移動ネットワーク - 解放前後を中心に -」『琉球大学人の移動と21世紀のグローバル社会: 東アジア“間地方交流”の過去と現在 - 済州と沖縄を中心として -』(招請講演)(於:沖縄県教職員共済会共済会館八汐荘), 7月10日, 2011年。

⑧高正子「4・3事件後に日本に渡ってきた女性たちの生活戦略 - 解放後日本に渡ってきた在日済州島人たちの生活史調査から -」『琉球大学人の移動と21世紀のグローバル社会: 東アジア“間地方交流”の過去と現在

- 済州と沖縄を中心として -』(招請講演)(於:沖縄県教職員共済会共済会館八汐荘), 7月10日, 2011年。

⑨鄭雅英「済州島出身者と学校教育」『琉球大学人の移動と21世紀のグローバル社会: 東アジア“間地方交流”の過去と現在 - 済州と沖縄を中心として -』(招請講演)(於:沖縄県教職員共済会共済会館八汐荘), 7月10日, 2011年。

⑩高正子「解放直後の在日済州島出身者の生活史調査の現状と課題」(韓国語)『済州4・3 62周年記念国際シンポジウム「記憶の口述と歴史」』(招待講演)(於:済州大学校、韓国), 10月8日, 2010年。

⑪藤永壯「在日済州人と「密航」」(韓国語)『済州4・3 62周年記念国際シンポジウム「記憶の口述と歴史」』(招待講演)(於:済州大学校・韓国), 10月8日, 2010年。

⑫伊地知紀子「「国境をまたぐ生活圏」の生成と変容 - 在日済州島出身者の移動経験から -」(韓国語)『2010年韓国社会史学会・ソウル大学校日本研究所共同学術大会』(於:ソウル大学校・韓国), 10月7日, 2010年。

⑬伊地知紀子「泉靖一『済州島』が示す済州島研究の意義と課題」(韓国語)『<済州島>(泉靖一著)の学術的意義」セミナー』(招待講演)(於:済州大学校耽羅文化研究所・韓国), 10月6日, 2010年。

〔図書〕(計4件)

①伊地知紀子, 藤永壯, 鄭雅英他『東アジアの間地方交流の過去と現在 - 済州と沖縄・奄美を中心として - (琉球大学人の移動と21世紀のグローバル社会 V)』彩流社, 東京, p. 491, 2012年。

②伊地知紀子, 藤永壯, 高正子, 鄭雅英, 高村童平, 福本拓, 村上尚子, 皇甫佳英, 高誠晩『安住の地を求めて - 在日済州人生活史 1』(韓国語)ソニン, ソウル, 韓国, p. 342, 2012年。

③伊地知紀子, 藤永壯他『済州女性史 II 日帝強占期』済州發展研究院, 済州道, 韓国, p. 733, 2011年。

④伊地知紀子, 藤永壯, 高正子, 鄭雅英, 文京洙, 高村童平, 村上尚子他『在日コリアン辞典』明石書店, 東京, p. 456, 2010年。

6. 研究組織
(1) 研究代表者

伊地知 紀子 (IJICHI NORIKO)
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40332829

(2) 研究分担者

藤永 壮 (FUJINAGA TAKESHI)
大阪産業大学・人間環境学部・
教授

研究者番号：00247876

文 京洙

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：70230026

鄭 雅英 (CHONG AHYONG)

立命館大学・経営学部・准教授

研究者番号：90434703

高 正子 (KO JEONGJA)

天理大学・国際文化学部・講師

研究者番号：80441418

高村 竜平 (TAKAMURA RYOHEI)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：30425128

(3) 連携研究者

原山 浩介 (HARAYAMA KOUSUKE)

国立歴史民俗博物館・助教

研究者番号：50413894

福本 拓 (FUKUMOTO TAKU)

三重大学・人文学部・研究員

研究者番号：50456810